

Interviewer

篠崎 弘



洋楽マン列伝

Yougaku-Man Retsuden

HIROSHI SHINOZAKI

1

ミュージック・マガジンの本



洋楽マン列伝 1

Interviewer

篠崎 弘



ISBN978-4-943959-32-8

C0073 ¥1852E

定価:本体1852円+税



ミュージック・
マガジンの本

横山東洋夫氏／70年代に大物ハンドを招いた“呼び屋”

ティレクター やDJ、評論家の方々を中心にお紹介してきたこの企画、今回は初めて海外アーティスト招聘元にご登場いたたく。横山東洋夫さんはユニハーサル オリエント プロモーションズの代表取締役として、60年代のアタモからレイ チャールス、ピンク フロイド、ホフ マーリーまで幅広いアーティストの興行に携わった。自称、最後の呼び屋。

■憧れや夢を生み出すプロモーター

東京生まれですか、戦争中は4歳で宮城県白石町（現在は市）に疎開して中3までいました。母方の祖父は漢学者で『新修漢和大字典』の著者、小柳司氣太。父の敬教は東大で岸信介と同期。農務省（現 農水省）では三島由紀夫の父の平岡梓とテスクを並べてたそうです。最後は米穀局長でしたか、豊島区の翼賛壮年団長たつたために戦後は公職追放を受けた。副団長は川口川乱歩たつたそうです。追放後、父は宮城県で弁護士を開業しましたが58歳で亡くなりました。

子供の頃の娯楽は野球と相撲と映画。中学のときに『ノエーン』や黒沢明の『りきる』を見た。歌謡曲では岡晴人や灰田勝彦。特に美空ひばりの人ファンでね、小5くらいでSP盤聴いて、白石から横浜に訪ねて行こうかと思った（笑）。

東京に戻ってからはいろいろありまして、高校を出た時にプロモーターの樋口久人さんに引き合わされれてカバン持ちになつた。力道山か刺された翌年、1964年ですね。樋口さんはスタントカーの



横山東洋夫 氏

70年代に大物ハンドを招いた“呼び屋”

よこやま とよお

1941年 東京生まれ。63年 日大豊山高校定時卒。樋口久人氏のもとでプロモーター業を学び、67年にユニハーサル オリエント プロモーションズを設立。アタモ レイ チャールス ピンク フロイド ティープ・パープル ホノ マリーなど 多数のコンサートを手かけた。現在はNPO自然環境保全センター 質問事業推進本部長。TMCA血液検査法の特許を所持した小林常雄博士の癌予知予防センターの事業化に取り組み かん死ゼロの世界貢献を目指す。

事故で右脚を失っていたから、私は毎日樋口さんをおぶつて仕事先に出かけ、興行を教わりました。当時の樋口さんは、スワン・プロモーションから社名変更して、ワールド・ワイド・オートレース・アソシエーションという会社名で Stanton Car なんかをやっていた。新聞社と組んで「○○新聞事業部」という名刺を持つて、豊島園なんかを借りて車の曲乗りを見せる。ドライバーは外国人。仕込みは安かつたと思いますよ。樋口さんは高いものは絶対にやらない。でも金をかけているように見せるのはうまかつた。

樋口さんの口癖は「興行師にはなるなよ」。「欧米ではプロモーターをアイデアマンというんだ。ただタレントを呼ぶだけじゃ駄目だ」と。「物語を作るのが呼び屋の仕事だ」と言うくらいだから、キャッチ・コピー作りはうまかった。ロス・ドレス・ディアマンテスは「ダイアモンドの声 水晶のギター」。カーメン・キャバレロは「ピアノの詩人」。何が詩人だ(笑)。リンボー・ダンスってのも、大手のお菓子のコマーシャルなんかに500万円くらいで仲介してたんですよ。本人は「コロッケだけ食べせりやいいんだから」なんて言つてましたよ(笑)。



1962年、沖縄での樋口久人さん。(提供=横山東洋夫氏)

樋口さんは仕事を詳しく教えてくれたんですか。

うーん、教わったっていうよりも、見て覚えたっていうか。毎日おぶつてているわけですから。「興行師では駄目だ。プロモーターであれ」ってのは独創的な発想が必要ってこと。ただアーティストを追つかけて呼ぶんじゃ全然面白くない。当時はプロモーターがイニシアティヴを持つてた。今の招聘会は下請けでしょ。日本側は会場を押さええて弁当を用意するだけになっちゃつた。

カーメン・キャバレロにしてもリンボー・ダンスにしても、樋口さんが憧れや夢の対象を作つて演出した。

そうですそうです。協同企画（後のキヨードー東京）の永島達司さんが兄貴分で、樋口さんは弟分でした。

ビートルズを呼んだことでも知られる永島さんは、スマートな招聘ビジネスのハシリ。

そう。素晴らしい人でした。海外での知名度も高くて、有名なアーティストはほとんど押さえてる。だから樋口さんはラテンの方に行つてトリオ・ロス・パンチヨスを呼んだり、向こうで売れないと

「こんにちは、ニッポンの皆さん」つてパンフレットを竹中さんが作ってくれて。その会見の日が石原裕次郎と三船敏郎の初共演の映画『黒部の太陽』の製作発表とぶつかったんです。でも次の日の新聞見た ragazzo（笑）。ドーンと。これは嬉しかったですか（笑）。「トウイギー来日決定！」つて。でも永島さんに取られちゃった（笑）。

向こうから「コントラクト（契約書）を送れ」とテレックスが来たんで、送ったんですよ。で、これでいいんだろうと。不安はあつたけど。ただ永島さんが動いてるのも聞こえました。で、取られた。もうそれからはタツ永島と横山東洋夫の戦いだつたです。向こうは老舗。こつちは若さと勢いがあるだけ。

アダモの「雪が降る」の日本語盤が発売されて大ヒットしたのは69年。最初の来日はその前ですね。



1979年、来日したアダモと握手する横山さん。アダモは当時、毎年のように来日していた。(提供=横山東洋夫氏)

永島さんと対等に張り合つたつていうのは独立してからです。最初にぶつかったのは67年のアダモの初来日。樋口さんのカバン持ちをしてから独立して、その年にユニバーサル・オリエント・プロモーションズを設立して、アダモと越路吹雪のジョイント公演を企画した。越路さんは東宝ですから、東宝の演出家の山本紫朗さんに越路のマネージャー役の岩谷時子さんを紹介してもらつて。評論家の竹中労さんが宣伝してくれた。

実はその前にトウイギーの来日を永島さんに持つていかれたつていう経験があつたんですよ。来日したのは67年10月。僕はその年の7月24日にニューオータニで来日決定の記者会見をやつたんです。

■永島達司さんとの戦い

ントを呼んだり。永島さんはものすごく樋口さんを可愛がつてたし、樋口さんも永島さんと張り合つたりはしなかつた。永島さんに助けられてもいたんですね。「ひとつ頼むよ達ちゃん」つてブラザース・フォーをやらせてもらつたりね。パンチヨスの興行も永島さんの人脈で全部やつたっていう。樋口さんが倒産したら、永島さんはベンチャーズの興行権を無料で3カ所、樋口さんにくれたんですよ。それで樋口さんの下で僕らが渋谷のリキパレスや福島なんかでやつた。アストロノウツも。ベンチャーズをやる時は木の枠を買ってきて自分たちで“ステ看”つてのを作つて、それにポスター貼つて、夜中にトラックで貼り歩きました。

だから激しい取り合いになるような状態ではなかった。越路さんがアダモの「ろくでなし」とか「夜のメロディー」「サン・トワ・マミー」とかを歌っていた。アダモの「ブルー・ジーンと皮ジャンパー」は北海道放送のヒット・パレードではビートルズを抜いて1位になつてたけど、まだそんな人気でもなかつた。作詞家として仕事をしていた安井かずみさんが来日の間ずっと僕のカバン持ちで、ツアーリについて回つたんです。で、彼女が「雪が降る」を日本語にした。それでヒットした。

アダモは「3大メロディ・メーカー」と言われてましたからね。ビートルズ、アダモ、ボブ・ディランと。

でもそれは日本での言い方ですよねえ。アメリカでは売れてなかつたはずですし。

そう、アメリカでは売れてなかつた。日本での人気は僕が作った。20回呼んでるんですもん(笑)。キヤツチ・コピーは「青春のアダモ／シシリーゲ生んだ天才／ベルギーが育て／パリが祝福した」。要するに下から這い上がつていつた、ほんとに苦労した人。僕はああいうアーティスト好きなんですよね。

66年のビートルズ来日の時は何をしてらっしゃつたんですか。

樋口さんと一緒にレツツ・ゴー・ビートルズってファン・クラブを作つて、機関誌も作つた。ファン・クラブでビートルズを呼ぼうという戦略(笑)。非公認の、樋口流の、全く異端のファン・クラブ(笑)。ただ、僕は無理だと思つてましたよ。ファン・クラブで呼べるなんてねえ。まあ駄目でしたけど。

洋楽興行に、旧来の興行界からの邪魔は?

なかつたですねえ。全然。なぜかというと我々は新聞社とかテレビ局とかメディアと一緒にやつてるからです。ここで区分けされるわけです。彼らにとつても別種のビジネス。商売敵じゃない。スタッフカードだつてみんな各地方の放送局の主催事業でしたから。それが樋口さんの言う「近代興行」。ボクシングなんかの従来型の興行とコンサートの興行の世界は全く別でした。つながりはほとんどない。まあ樋口さんも元はボクシング興行の世界なんですけどね。白井義男が樋口さんの兄貴分ですか。ボクシングの興行は昔はだいたいヤクザ関係の人たちが始めたわけですから。演歌もその系列の人人が仕切つてた。

永島さんはそういう人たちとトラブルを起こさないやり方に苦労した世代ですね。「そこの親分、どけ!」って永島さんが怒鳴つたつて話は私もよく聞きましたよ(笑)。

■ ピンク・フロイドとディープ・パープル

71年の箱根アフロディーテはニッポン放送が自分のリスクでやつたイベント。うちはメイン・プロジェクトのピンク・フロイドの招聘。でも企画から一緒の共同プロジェクトでした。最初からピンク・フロイドに決まつたわけじやなくて、駄目だつたらディープ・パープルになつたかも知れなかつた。でもピンク・フロイドがいいだろうと。この時、私は新宿のアパート暮らしで電話もなかつたんです。ロンドンで契約して帰つてきて、アパートの廊下のピンク電話に10円玉入れて福田一郎さんに電話して、「ピンク・フロイドと契約しました」って。「それはすごいのと契約しましたねえ」って言われたのを覚えてる。

72年にはディープ・パープルの初来日を手がけましたね。
『ライヴ・イン・ジャパン』が録音されたライヴ。

ディープ・パープルの思い出は、なんてつたつてその次の年、2度目の来日で二日目の武道館公演が暴動で中止になつた時ですね。强行か中止かつていうんで、ニッポン放送事業部の人たちと徹夜ですよ。初日の公演が前年の演奏内容と同



1972年8月のディープ・パープル初来日公演のパンフレット。

じだった、アンコールもなかつたつていうんで、ファンが怒つたんですよ。「舐めるな、ふざけるな」つて、武道館で火をつけたりした。で、翌日の公演はキャンセル。僕らは二日目に賭けてたわけですよ。1日じゃペイできないし。

そのツアーレストランとベースのロジャード・グローヴァーが脱退することが決まつてた。歴史的なコンサートになるはずでした。

73年のジェフ・ベックは、ウドーさんが「来日決定」のチラシを放送局に配つてるのが耳に入つてきました。でもその時まだ契約してないんですよ、ウドーさんは。で、ロリー・ギヤラガーなんかで親しくなつたトニー・ハワードっていうエージェントがちょうど来日してたので「サインしたのか?」って聞くと「いや、してない」「うちにやらせないか」「いいよ、オレが最終的に決めるんだから」。それでジェフ・ベックはうちに来たんです。ベック・ボガート&アピスで。

その後、同業者は?

僕がピンク・フロイドやディープ・パープルをやつてた頃はキヨードーさんはロックにも力を入れてました。でもその後キヨードーは「ラヴ・サウンズ」に行つた。それで72年頃からウドーさんが本

格的にロックを引き受けたんですね。当時は民音や音協とか鑑賞団体も盛んで、ラヴ・サウンズみたいな需要もあった。でも鑑賞団体に売る商売はやり甲斐はないですねえ。

キヨーデーに勝った一番の思い出は、72年のディオンヌ・ワーウィック初来日かな。永島さんがずっと「なんでオレにやらせなかつた」って言つてたらしいですよ。ウイリアム・モーリスつてニューヨークのエージェントのシャーリー・ラパポートが「タツにずっと恨みごと言われた」って(笑)。レイ・チャールズのマネージャーのジョー・アダムズが私を強く推薦してくれたんです。77年にジュリー・アンドリュースが僕の方に来たっていうのもハリー・ベラフオンテの強烈な推薦なんです。彼女本人が言つてましたもん。「いろんなところからいいオファーもあつたけど、最後に決めたのはハリーからの電話だつた」って。

我々はパーチエサーなんですね。雇い主。僕みたいな若いプロモーターをサラ・ヴォーンが「ボス、ボス」って言うんです。契約も「スポンサー・シップ」って書いてある。または「パーチエサー」。航空運賃からギヤラからホテル代、国内交通費、すべてを私のリスクでやつてるわけだから。ジユリー・アンドリュースの時はビクターの佐藤修さんが課長かなんかで「映画俳優は切符が売れません」と。「この企画は大失敗ですね」って(笑)言つたんですよ。「なーにをこんちくしよう」と思つてね。で、武道館3回ソールド・アウト。佐藤さんは当日来て「いやあ、脱帽しました」なんてね。

トウェイギーのあと、キヨーデーさんに取られたケースは?

ないと思います。75年に「4大グレート・ボーカル」で、サラ・ヴォーン、カーメン・マックレー、ペギー・リー、エラ・フィッツツジエラルドをやつた時には永島さんからちょっと嫌み言われた。前に永島さんがエラを呼んでたんで、「お互いに呼んだものは手を出さないとことならば、ちょっと違うんじゃないの」っていう。でも何十年も前だから。

『最後の呼び屋』横山東洋夫さんは、ご存命なら是非このシリーズに登場いただきたかったキヨードー東京の永島圭司と敷しハーティストの争奪戦を繰り広げた。プロモーターならではの苦労をうかがう。

興行で一番苦労したのは何ですか。

■アーティストを入国させるための苦労

入国ですね。外国で逮捕歴があると、まず入国できないんです。プロモーターにとつてはそこが一番。命取り。不許可になつたら終わりですから。来日の話があると、まずインター・ポールに問い合わせあわ

せて逮捕歴を確かめる。で、パスポート・インフォメーションを取つて、事前に法務省に行つて入国審査課に相談するんです。それを無視すると、たとえビザがおりても駄目。ビザは外務省。入国、上陸許可は法務省。全然別なんです。うちは羽田入管の所長だった方に定年後に顧問になつてもらいました。入管のいろんな制度を作った人じやないかな。

例えばレイ・チャールズは麻薬での逮捕歴が何度もあつたから普通は入国できない。そこで僕が直接田中伊三次法務大臣に陳情したんです。いかに素晴らしいアーティストであるかとか、公演の意義とかを訴えて、「特別上陸許可」というのをもらつた。入管では1回ハネられたけど法務大臣の裁量で入つた。その後ほかのプロモーターも同じやり方で招聘してましたね。1回許可がおりればその後はOKというわけにはいかない。あくまでも特例ですから。毎回そのやりかたをするしかないんです。

レイ・チャールズ本人は入国に関して横山さんがどんなに苦労したかはわかつてましたか。

わかつてますよお。もう。さつき話に出たヴィリアム・モーリスっていうエージェントのシャーリー・ラ・パ・ポートっていう女性が窓口だつたんですよ。で、レイのバンドの一人が入国不許可になつたことがあるんです。レイは彼がないんだつたら日本に行かないと言つて頑張つたんですよ。シャーリーは目の前で電話かけて泣いてましたね。ジョー・アダムズっていうレイのマネージャーを一所懸命に説得して、最終的にその一人を外したメンバーを連れてくと。でもほかのメンバーにも不安があ



1970年7月、来日したレイ・チャールズと握手する横山さん。
(提供=横山東洋夫氏)

つたから、観光ビザを入れたんですよ(笑)。勝手に就労したつてバレたらまずいですから、もうほんとに気を遣つて。産経ホールでコンサートやつたんです。そしたらその時に音楽にうるさい新聞記者さんがバンドを見つけて「すごいやつがいる」と、でかい声で言うわけ(笑)。「ジヨニー・コールがいるよ」とかね。こつちは真っ青ですよ。バツクの名前は書かないでくれとも言えない。やぶ蛇だもの。だから新聞記者の人ほんと怖いです。勉強してるから。こつちはもうハラハラ。誰かが、知らない人

が後ろから入ってきてステージの人数を数えてたっていうんですよ。あれは入管の人だとか、そういう風に思っちゃうじゃないですか。でもなんでもなかつた。無事に帰国した。それで、もうこういう悩みはほんとに、二度とやりたくないなと思いましたね。

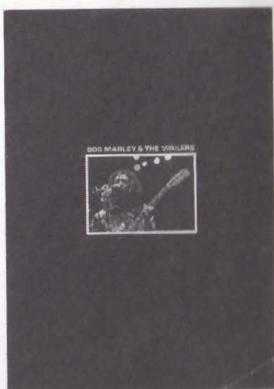
そこまで苦労して呼んだのは?

もちろん、レイ・チャールズがすごいアーティストだからですよ。ビートルズの4人のうち3人が「尊敬する人」つていつたら「レイ」つて答えるわけでしょ。そのぐらいの人ですから。そらあもうレイつたらもう。尊敬しかないですから。

ボブ・マリーの時（79年）もそういう手続きをとつたんですか。

奇跡的に何もなかつた。逮捕歴がないから。みんなが心配して無理だろうと言われていたけれど、大丈夫だつた。そうして来日したら、これがもう、パツカパツカ吸つてんの（笑）。

入国の時に荷物調べられるでしょ。



1979年1月のボブ・マリー&ザ・ウェイラーズ日本公演のパンフレット。

開けられなかつたんでしょうねえ。良かつたです（ため息）。ボブのライヴを見た人つてのは、ほんとに幸せですよ。あれを見なかつた人は本当にもつたいない。そのぐらいのライヴだつたですね。ホテルは新宿のサンルートを何フロアか借り切つて、徹底的にガードして第三者を入れないようになつた。インタヴューもやらなかつたと思います。警戒してましたからね。知らない人間は入れない。ボブ・マーリーはこつちからのオファーでした。ジミー・クリフとかレゲエの人たちをたくさん呼ぼうとうござる。

レゲエはお好きだつたんですか。

いやまあ、好きとか嫌いとかはあんまり…（笑）。入国といえば71年頃、エルヴィス・プレスリーがラスヴェガスのヒルトン・インターナショナルに出ていた頃、呼ぼうという話があつたんですよ。評論家のいソノテルヲさんに紹介してもらつたクラブ・リビエラの経営者、久保正雄さんとで。久保さんは東日貿易でデヴィ夫人をスカルノに紹介した政商で、長島茂雄や高倉健の後援者だつた人。久保さんはキヨードーの永島達司さんと親しかつたんだけど、「力になろう」と言つてくれて。当時久保

横山東洋夫氏／70年代に大物バンドを招いた“呼び屋”

さんと親しかった弘田三枝子をプロデューサーにして。で、僕はパークー大佐に会いに行つた。ヒルトン・インターナショナルに。でもその時には結論が出ないで、「日本に来るなら有力な受け皿」ということになつた。でもずいぶん長くほつとかれて、結局実現しないでエルヴィスは死んじやつた。永島さんによれば「パークー大佐は自身にも不法入国前の歴史があつて、アメリカから出られなかつたんだ」つて。

レコード会社は興行成績に関係なく呼びたがるでしょ。

でもガラガラのコンサートなんかやられたら、かえつてよくないことがある。持ちつ持たれつですよ。レコードが売れてもチケットが売れるとは限らない。その逆はあります。会場でも売れませんから。シングルが売れたつて駄目。シングル・ヒットが1曲か2曲出たつて、興行はまず無理。やっぱりアルバムが売れないと。でもレコード会社に騙されて興行やる場合もあるんですよ。「これはこれから伸びる」とか言つてね(笑)。フォリナーなんかは最初から赤字覚悟でしたね。

ちょっとジャズの話に移りましょう。ジャズに関してはファン層も会場の規模も違う。ビジネスとして

では?

ジャズはボロ儲けってのはできないでしょうね。でも手堅い。僕の場合はニューポート・ジャズ・フェスティヴァルのプロデューサー、ジョージ・ウェインと親しくなつて提携したので、まあジョージの小遣い稼ぎに貢献しようと(笑)。あいつを通すと高くなるんです。15%くらい。でもまあいいだろうと。その代わり確実にアーティストを用意してくれと。ニューポートをあそこまでやつた人ですから。もう一人、ノーマン・グラントも、対抗馬。ロックだと興行師はシド・バーンスタン。ペイ・シティ・ローラーズとかやつた人。ロックの公演はほとんどシド。僕はシドとも仲よかつたですけど。

で、ネゴシエーターが僕の場合はロサンゼルスのアラン・ブレックマン。ニダランダー社っていう全米劇場チーノンのブッキングをやつてたアランがうちのアメリカでの代理人。1ドル300円か320円くらいの頃にひと月5500ドルだつたからねえ。厳しかつたですよ。もともとはLAのグリーク・シアターのブッキングやつてたから力があつて。非常にいいんですけど、でも高くて合わない。それで1年でトニー・パパつてのに換えたんですよ。月1000ドルくらいで(笑)。そしたらそのトニー・パパがボブ・マーリーをつかまえてくれた。

先ほどレゲエは「好きでも嫌いでもなかつた」と。プロモーターとしての面白さでやつたということ

■ベラフロンテとひばりを会わせる

ですね。音楽が好きでぜひ呼びたいというのとはちょっと違つたんですね。

違いますね。ビジネスとして面白かったんですねえ。自分自身呼べて嬉しかったというのは、ハリ・ベラフオンテかなあ。74年3月。14年ぶりの来日の時。その前68年にマーティン・ルーサー・キング牧師に手紙を書いたんです。牧師の演説とベラフオンテのショー。これを組み合わせたコンサートのプロポーザルをしたんです。そしたらキング牧師から「出てもいい」っていう手紙が来たんです。「スケジュールを調整してからしばらく時間をくれ」って。でもそれから何日かしてキング牧師は撃たれて死んだんですね。それで後にベラフオンテをラスヴェガスに訪ねてつたんです。その手紙も見せて。もう彼は感激してハグですよ。それで彼は来てくれたんですよ。

その74年の公演ポスターにいい写真を使って礼を言われたのがビクターの石島穂さんでしたね。

その時は美空ひばりさんに会わせたんです。その前に竹中労さんと浅草に行つて黄楊の櫛を買ってね。「ひばりからのプレゼントだ」ということでニューヨークに持つてつべラフオンテに渡したわけ。忘れもしない、冬の寒い時にベラフオンテ・エンタープライズで。で、来日の時にお礼で会うと。各マスコミには櫛の写真を「美空ひばりさんが贈った黄楊の櫛です」って送つた。で「雛祭りの夜にひばりさんとベラフオンテさんがデートをします。是非ご取材下さい」というのを出したんです。これティだつた。

でもうビルトン・ホテルにカメラがズラーツと来て(笑)。ひばりさんは1時間前に来てるんですよ。「今日は私、素晴らしい恋人と会えるのよ」とかなんとか言って(笑)。それで初対面。ベラフオンテが奥さんと一緒に出てきてひばりさんと抱き合つた。それが次の日のスポーツ新聞にドーンと出たんですね。公演はサンプラザ。ロビーは芸能人だらけ(笑)。これはどちらにとつても最高のパブリティだつた。

夜にひばり邸に招待を受けたんですよ。それを僕は断つて代わりにうちの若い連中をやつたんだ。なぜ行かなかつたのか。やっぱり照れ屋なんですね。僕だけが行かなかつた。子供の頃から大ファンだつたのに。今も悔やまれます。

その後、料亭でみんなで集まつて食事して、その時にひばりさんが歌つたんですよ。週刊誌には「美空ひばり、ベラフオンテの前で△歌入り観音絃▽を無伴奏で歌う」って書いてある。この時のテープが残つてるんですね。竹中労さんや山本徳源さんがいて、ひばりさんのお袋さんも出てきてしやべつて。ベラフオンテの声も。それを発売しようかなと思つたこともあるくらい(笑)。ひばり記念館かなんかで。

この時はテレビの中継がうまくいかなくて、もう1回撮らなきやなんなかつたんです。で、厚生年金で追加公演をやつたんですね。それで追加パブリシティが必要になつて宮城まりこさんを引っ張り出してね。ベラフオンテがねむの木学園に寄付。寄付と言つても私が出してるんですけど、実際は(笑)。「ベラフオンテありがとう」つてスポーツ紙の1面に出ました。

横山東洋夫氏 70年代に大物ハノトを招いた「呼び屋」

73年にシャクソン5を招聘しますね。

■誰もできないことをやるのが、呼び屋

あの初来日はまさに永島さんと激突！ですね。たつて永島さんはモータウンの日本代表みたいな立場たつた。ところかコンサートの権利は私が取つちやつたわけです。東京音楽祭のケストに。僕はシャクソン5の親父と仲よくなつたんですよ、マイケル・シャクソンの親父と。あの頃は親父かすへて握つてたから。で、永島さんの顔が立たないからTBSの人とヒルトンて3人て会つた。東京音楽祭は永島さんを通してやるということにすれば落ち着くということたつたから、そのコントラクトに東京音楽祭に関しては「スルー・タツ」と一言だけ入れる。でも実質は全くノー・タノチです。そういう形で手を打つた。



1973年4~5月のシャクソン5+1日本公演のハーフレット。末弟ランティも加わった6人での末日だった。

ショーシャキリスを呼んだ時（70年）は忘れられないですね。永島さんにチャキリス側への紹介の手紙を英語で書いてもらつたんです。そしたら永島さんはその手紙の最後にちょっと僕への否定的な意見を書いて、それが僕の方にもはれちゃつた。永島さんは何かなんとも僕にチャキリスをやらせたくなかつた。て

も逆に嬉しかつたですよね、横山東洋夫人っていう人間をここまで意識してくれる、あの憧れの永島さんがそこまで。

ンヤスや口ノクをやりながら、時々沖縄民謡の大家 嘉手苅林昌さんとかの「琉球フェスティバル」もおやりになつた。

全部、竹中労さんの縁です。竹中さんは素晴らしい人だつた。力もあつたし、あの人は左翼であつても右翼とも付き合つうし。川内康範さんなんかともツーカーでした。僕はそういう自在なコネクションに頼つて。琉球フェスなんてのはあんまり儲からなつてすよ。でも労さんとは志か非常に合うといふことですねえ。いまでも、竹中さんか生きてればとんないに楽しくやれるかなと思いますよ。子供みたいなどこかあつたから。

要するに、タレントを育て上け、イニシアティヴを持つて何かを作り上けていくのが呼び屋。人かやらないこと、誰もできないことをやるのか呼び屋魂。だから、海外のフノキンク・エーシェントの手下で会場を手配してたたコンサートの代行をやる、今の日本の興行の世界には何の魅力も感しませんねえ。

〔2012年1月31日 中央区 銀座のオフィスで〕